

生態系産業

酒匂川流域のコメづくりも、アマゾン河流域の大規模農林開発も、単一作物による植栽は、天災に弱く、見事に破綻する歴史は厳然と存在する。

その一方、複雑な地形を有する丘陵地域は、土壌と市場の距離等の要因により大規模開発から取り残されて来た。しかし、尊徳翁が洞察されたように、河川の跡地はモザイク状に肥沃で、未知なる資源の宝庫なのである。

単一の経済作物一辺倒では、江戸幕府であろうが世界的大財閥であろうが、相場変動と地力低下、激甚災害や病虫害発生に対し打つ手は無い。

100年前に日本人移民を受け入れたコーヒー大農園も、80年前にアマゾンニアに進出したフォード自動車帝国はじめ大資本の資源開発は、見事に経営破綻し廃墟と化す。大資本敗退の教訓は、自然の尊厳を知らしめたことに尽きる。

21世紀に入って、東南アジアのエビ養殖、カカオ、バナナ等の超巨大産業は、ウイルスとの闘いに惨敗し、根本的な解決策は無い。

辛うじて生産を続けるのは、零細な伝統的生産者に限られている。

作物と静かに語り合う農民の姿勢と、温和に着実に森を育てる森林農法こそ、強欲資本主義に荒らされた経済市場と荒廃した教育の復興への狼煙となろう。

偽りの多文化共生（強制）ではなく、奴隷労働の廃絶を目標とする報徳思想の啓発と普及は、健全な家族主体の食卓の復興から始まると予想する。

飢饉の時代の白米限定飢餓ではなく、有毒食品の拒絶から素食への挑戦そして健脳食品の開発へと、誰もが楽しみながら新たな食の文明開化を迎えよう。

石油文明の築いた社会基盤に感謝してこそ、本当の情報社会は機能する。

尊徳翁が金持ちの息子を、馬糞茸に例えたのは、加工、流通技術が皆無の時代であった。

現代は馬糞茸はマッシュルームと改称され、都会人の食卓を潤し、薬用植物にまで進化している。農産廃棄物を原料とした菌床は、優良な堆肥として農地に還元され、健全な作物を養い、見事な閉鎖生態系を完結させる。

昭和初期まで、相模湾に海の幸が溢れかえろうと、丹沢山系の河川が、天然鮎に埋め尽くされようと、消費者に届かなければ価格はあっても無いようなもの。足柄地方より遙か辺境の地に、良質の水源地は数限りなく、日本酒蔵元、茶畑キノコ生産地はひっそり隠れていた。魚族、鳥類の楽園も散在していた。

価格は無いと言うよりも、値段を付けることの恐れ多い、生命の結晶である。

森を育てると言う表現は、人間の経済活動を重視する語感があるけれど、生まれ育った郷土への植林という推譲行為は、陰徳を積み上げ、地域に予想を超えた恩恵を運んでいる。

足柄地方の良質な水源地に、優良先進企業が集まり、適正価格で水を購入する。知識集約産業は技術者と家族を集め、家も建つ。

単に高額納税者が増えるばかりでなく、住民の教養には、様々な需要も眠る。

関東の覇者 北条早雲の昔から勝海舟の幕府海軍誕生の頃まで、兵士は肉体を酷使し、1日に、兵隊ひとりコメ一升（1.5Kg）の握り飯が賄われていた。現在のおにぎりに換算し